

関係ないものであろう。

(10)は、上部に切り込みの痕跡が残る。(12)は、上下に木組みの切り込みがあり、右側面の四力所に釘孔が認められる。折敷の縁板に墨書したものであろう。(13)は、上部に径五mmの穿孔を施す。(15)は小型の曲物の底板に墨書したものの。

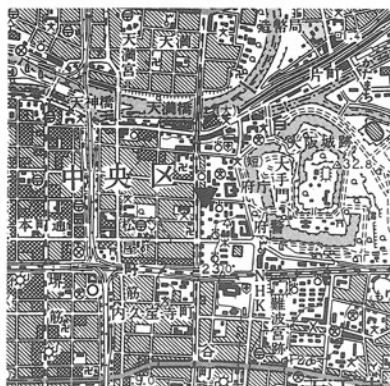
なお、木簡の釈読にあたっては、京都大学の西山良平氏、京都橘大学の有坂道子氏、滋賀県立大学の東幸代氏のご教示を得た。

(原山充志〈京都市考古資料館〉)

大阪・大坂城跡

おおさかじょう

- 1 所在地 大阪市中心区谷町二丁目
- 2 調査期間 OS〇五―三次調査 二〇〇五年(平17) 七月、八月
- 3 発掘機関 (財)大阪府文化財協会
- 4 調査担当者 平井 和
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 豊臣氏大坂城前期(一五八〇年―一五九八年)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪東北部)

調査地は大坂城の西方に広がる武家地の一角にあたり、大坂城大手門から約五〇〇m西方、大手通の南側に位置する。調査面積は二七〇㎡である。木簡は、豊臣氏大坂城前期(天正八年(一五八〇)―慶長三年(一五九八))に属する廃棄土坑から計六点出土した。廃棄土坑は一三基確認しており、木簡は漆製

品・木製品・鑄造関係遺物・陶磁器などとともに出土した。内訳は、SK一五・SK一八・SK一一・SK一三・SK一六・SK二一から各一点である。

これらの廃棄土坑の規模と形状は次の通りである。SK一五は長軸二・二m短軸二・五m深さ〇・八五mの方形土坑。SK一八は長径三・一m短径二・一m深さ一・三mの長円形土坑。SK一一は長径約二・〇m短径約一・六m深さ約一・〇mの長円形土坑。SK一三は長軸一・四m短軸一・二m深さ約一・〇mの方形土坑。SK一六は長軸約一・七m短軸一・三m深さ約〇・七mの方形土坑。SK二一は長径一・六m短径一・〇m深さ一・一mの長円形土坑。

このうちSK一五・SK一三・SK一六は方形を呈して形状が似ており、位置も近接している。SK一一もこれらの方形土坑と近い位置にあるが、形状は長円形を呈しており異なる。SK一八とSK二一はともに長円形の土坑で位置も近接している。これらは方形土坑と近い位置にありながら、別のまとまりとして捉え得る可能性がある。

これらの廃棄土坑は、遺物に肥前磁器が見られないことなどからみて、豊臣氏大坂城前期に埋められたものと考えられ、三の丸築造以前に、当該地の近くに金属加工に関わる工房や住居があったことを示唆する資料である。

8 本簡の积文・内容

SK一五

(1) ・「> (目印) 六月十九日 □丸
 鑲正ミ式百斤入」

・「> (目印) 南無伍大力井
 鳥居小右衛門尉□」

209×50×10 032

SK一八

(2) ・「>□□兵衛」

・「>□□」

160×23×3.5 033

SK一一

(3) 「>な□□郎□□」

83×20×2.5 033

SK一三

(4) 「あ□□□□」

120×(36)×10 061

SK一六

(5) □□

径119×厚7 061

SK二一

(6) □等□

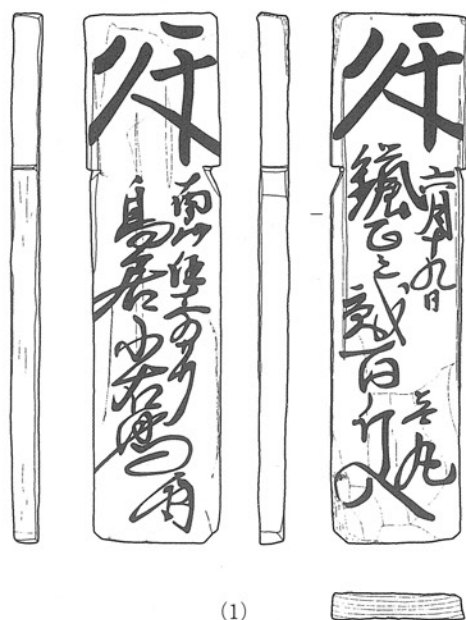
(65)×23×0.1 081

(1)は板目材を加工した荷札木簡で、上端から約6cmのところの左右側縁に切り込みがあり、下端部左右側縁は角を切り落としている。表面に「六月十九日」と「鑑正貳百斤入」が記されていることから、当該地への錫納入に関わるものであることがわかる。裏面には「南無伍大力井（菩薩の異体字）」として、荷の到着の無事を祈願した盗難除けの呪句と、納入者と考えられる「鳥居小右衛門尉」の人名が見える。(2)は板目材を加工した荷札木簡で、上部の左右側縁部に切り込みを入れ、下端部は先細りに加工したものである。表面には、「兵衛」という人名の一部が記されているほかに、刺突痕が二カ所に認められる。(3)は柁目材を加工した荷札木簡で、上部の左右側縁に切り込みがあり、下端部は一部欠損しているものの、先細りに加工していることが窺われる。「な」「郎」は、人名の一部の可能性がある。(4)は柁目材を加工した容器の一部である。(5)は柁目材を加工した曲物底板の一部と考えられる。(6)は柁目材を加工した柿經の一部と考えられる。

9 関係文献

平井和「豊臣前期の「鑑」と記された荷札」(財大阪市文化財協会『葦火』二二二、二〇〇六年)

(平井 和、釈文 豆谷浩之・鳥居信子)



(1)